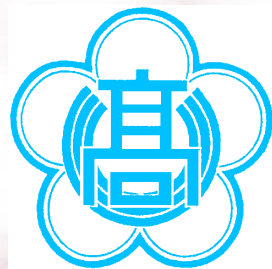


智翠館特別コース 卒業生 インタビュー



一般入試編

◎インタビューアー(聞き手)

:高橋 直也(智翠館特別コース主任)

◎インタビューイー(語り手)

:**Aさん**

○○**大学**

共創学部 共創学科

受験

:**Bさん**

□□**大学**

薬学部 薬学科

受験

:**Cさん**

△△**大学**

理学部 数学科

受験



高橋：智翠館高校、特に智翠館特別コースに何を期待して入学した？



Aさん：中学生の時から学ぶことが好きで、特に英語が好きだったので東京外語大に行きたいと思って、智翠館特別コースに入りました。



Aさん：私は学校やコース選びの上で部活動のウエイトが結構高く、11月ごろまでは部活動に精一杯取り組める文理進学コースを検討していたんですが、受験勉強を進める中で、だんだんと勉強への熱意も高まってきて、高校でしっかりと学んで大学でより専門的に学びを深めていきたいと思うようになったので、最終的には特別コースを選択しました。

Bさん：自分はパンフレットを見たり、オープンキャンパスに参加して、特別コースでは広い机やリラックスできるソフトな椅子など充実した学習環境に魅力を感じ、すごく勉強しやすいそうだったので入学しました。





Cさん：他の高校も候補として検討していましたが、智翠館高校では授業を中心とする基本的な学習の枠組み以外では、日々の宿題に追われることなく学びたいことの優先順位を生徒自身が優先順位を決めて学習することができて自由度が高く、教科の先生と個別に質問対応などで学びを深めることができることなどに惹かれて入学しました。

Cさん：特に特別コースのオープンキャンパスに参加したときに、3年生の生徒自身が自分の本当に興味を持っていることを掘り下げた内容で授業体験を行なってくれて、その時の心の底から楽しそうに授業をしてくれる姿を見て、また3年生で行う『学び祭』という探究学習の成果発表で、僕の好きな数学の魅力的な世界を高校数学の枠を超えて発表したい！と強く思ったから入学を決めました。





高橋：実際入学してみて、自分の思い描いていたことと比べてどうだった？

Aさん：1・2年生の時は部活で忙しくて時間が取れず、勉強との両立が難しかったけど、英単語や文法などの基本をとにかく少しの時間を見つけてやりこむ努力をしてました。そのことが3年生になってからの受験勉強でようやく生きてきて大きく成績を伸ばすことができたと思います。また初めは英語というものを狭義的に考えていたんだけど、特別コースの授業を受ける中で、さらに探究学習や『学び祭』など教科横断的に学びが広がって広がり行き、その中でだんだんと興味関心の輪が「英語」から「世界史」「地政学」「国際社会」・・・と広がって、気が付いたら外国語大学ではなく〇〇大学の共創学部というところを目指すようになってました。

高橋：部活動と勉強の両立を特別コースの先生がどんなふうに支えてくれた？

Aさん：例えば部活が忙しくて勉強できないで困っていた時に、理科の嶋田先生とか担当教科を越えて他の教科についても親身に相談に乗ってくださって、「こんな参考書もあるから見てみたら」といったアドバイスをくださったり、先生方も勉強の遅れを指摘することはされず、廊下ですれ違った時などに「定期演奏会よかったよ」とか声をかけてくださったことで「応援してもらえてるんだ」と実感し、「もっと頑張ろう」と努力することができました。



高橋：Bさんは、実際入学してみて、自分が思い描いていたことと比較してどうだった？

Bさん：塾に行っていない自分にとって自宅でスマホの誘惑と戦いながら勉強できるかというとなかなか難しく、かといって市内には学習できるフリースペース的なところが少なく、いろんな人が利用するので不便だったりするので、特別コースでは教室など勉強しやすい環境で集中できたし、スクールバスの2便の時間まで教室に残って勉強させてくれたり、土曜日にも教室を開放して登校させてくれたりして、家では身につかなかった（と思う）学習習慣の確立が特別コースだからこそできたと思う。



高橋：放課後の時間や休みの日にも教室や自習室、資料室が開放されていて、みんなが自由にそれぞれの学習をしているわけだけど、そのことの良さって何なんだろうね？

Bさん：やっぱり1、2年の頃はおしゃべりをして騒がしくなることもあったけど、自由度の高い教室以外にも私語禁止などのルールが厳しい自習室とか、資料を探して見ながら学習ができる資料室とかが在ったし、数理部や共テR部などの講習が開講されて、そこに参加したときには気持ちを切り替えて集中できた。その時の自分のニーズに合った環境を選んで学習できたことが良かったかな。



Aさん：それに、**Cさん**のような数学が得意な人がいて、分からないところをすぐに聞いて勉強を教えてもらえたりしたりしたのも良かったと思う。

高橋：**Cさん**は入学してみてどうだった？

Cさん：自分が求めていた自由な学習という点は想像通りだったんだけど、部活動が忙しかったりして時間の使い方に関しては自分の自制心が弱くて、もっと勉強できたんじゃないか、勉強量が足りなかったんじゃないかとか思ったりもします。でも時間や場所に関する環境の良さはすごく感じましたね。



高橋：智翠館は自由な雰囲気、ゆるい面もあった中で、逆に「ゆるい」からこそ良かった面って何があると思う？

Cさん：僕は中学時代に数学に興味があって智翠館に入学したわけだけど、高校で数学を学び深めていく中で、現代数学の最先端に触れた結果、僕には無理かなと思って一度は数学をあきらめて、データサイエンスという別の世界に興味移っていったんです。でも学び祭などの取り組みを通じて自分の興味関心を突き詰めていく中で、一周回って最後にはやっぱり自分がやりたいのは数学なんだと気づけたことで初心に帰ったわけですが、それもこの自由な学びの環境有らばこそだと思いますね。

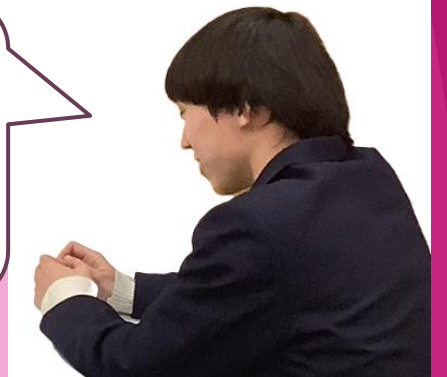


高橋：みんなを見てると、ただ勉強だけやってたとか部活だけ頑張ったとかじゃなくて、学校を楽しんでた。そして自分が興味関心を持っていることを回遊し、やりたいことをもれなくやり尽くし、教科の勉強、探究学習、部活動、学校行事、最後は推薦入試から一般入試までをコンプリートして現在に至るという、ある意味このコースが目指す理想像を体現してくれたことに感謝してます。そこで聞いてみたいのは、君たちのその柔軟性がどこから来るのか？そのエネルギーやバイタリティーを支えてきたのは何なのかということなんだけど・・・

Bさん：生徒数に対して先生が多いから、聞きたいことがスムーズに聞けたことは大きかったです。そして先生と生徒との距離が近く、自分をさらけだすことを躊躇なくできたのも理由かな。



Cさん：コースの生徒も皆優しい子ばかりだよね。生徒の間で、いじめや衝突のようなこともほとんどなかった・・・先生も生徒も皆フレンドリーで、違いに寛容で多様性をみんなで共有してるのはすごいなあと感じましたね。リラックスして3年間を過ごすことができました。





高橋：先生方に関してはどう？なんかエピソードとかある？



Aさん：中学時代は先生に対しても友達に対しても、自分が「分からない」ということを言葉に出して言えなかったけど、高校に入ってから先生も「分からない」ということに対して否定的にならず熱心に教えて下さるし、友達も普通に受け入れて一緒に考えてくれたから、自然に言えるようになったし聞けるようになりました。
入学当初は数学の授業のペースが早くてついていけない時に「分からない」と一言言っただけで、**Cさん**みたいに数学が得意な人がすぐに反応して教えてくれたし、一時、生物が分からなくなった時に先生に質問に行ったら色々説明の仕方を工夫して自分が分かるまで丁寧に教えて下さったのでとても助かりましたし安心しました。

Cさん：とうとう担任の松村先生に一度も怒られることなく学生生活が終わってしまった・・・



Bさん：ほんと、孫のように扱ってくれたね。





高橋：3人が今現在持っている将来の夢は？

Aさん：世界の紛争の解決に携われるような人間になりたいと思う。

高橋：そのように思えるようになったのは？



Aさん：元々英語に興味があったので海外で働きたいとは思っていたんだけど、世界史の授業や学びまつりで地政学をテーマにして学んだ時に、いまの日本も、世界も相当やばい状況にあるんじゃないかと実感したことで、その解決に自分が何らかに関わることができたらなあと思うようになりました。

Bさん：自分は薬のお世話になったことがあるので、将来は製薬会社で働きたい、もしくは大学に残って研究職に就きたいと小さい頃から思って来ました。そして病気で苦しんでいる世界の人たちに少しでも助けになるように特効薬を開発したりすることだけじゃなくて、効能を広めて普及させる活動をしたり、健康に関する教育的な活動もしていきたいと思っています。



Cさん：自分は将来の仕事につながるような具体的な夢はまだないんですけど、小さい頃から数学が好きなので、大学4年間を通じて現代数学の深淵を極めたいというのが今のところの夢ですかね・・・その後は大学院に進んで研究の道に没頭したいし、自分が研究した成果が未来で社会に応用されて新たな発明につながったら嬉しいですね。



高橋：僕と**Cさん**は学び祭や入試の際にすごく沢山数学の話題で対話してきたけど、僕はすごく楽しかったんだけど、**Cさん**は僕と話してて楽しかったのかな？

Cさん：そうですね、数理論理学なんかの難解な分野に関しては、じっくり話をしてくれるクラスメイトがなかなかいなかったけど、高橋先生がいてくれて、満足するまでとことん話ができて、数学への理解がすごく深まったのですごく楽しかったです。



高橋：では次に、智翠館特別コースが、自分の夢の後押しにどのように貢献してくれたかについて見解を聞きたいんだけど・・・



Aさん：直接的に何かをしてもらえたというよりは、3年間特別コースという空間で過ごしたことで、包括的に今の進路や自分の成長に導いてもらえたという感じですね。智翠館で過ごさなければ、国際社会で活躍したいと考えるようになっていないし、今の進路も選んでいないと思う。



Bさん：推薦入試を受けたときに、自分の志望理由を一緒に考えてくれたり、面接練習を一緒にしてくれたりする中で、自分の考えや未来への展望がしっかりと見えるようになってきたので、そういうところは今の自分の夢につながっているし、助けてもらったなという感じです。



高橋：三人とも学校推薦型選抜や総合型選抜の推薦入試も受けてるんだけど、受けてみてどうでしたか？

Aさん：志望理由書等を書く時に、書かなければならない内容が多岐にわたっていて、しかも量がすごく多くて、自分の頭の引き出しをいくら探ってみても言葉が見つからず、自分の力だけではとても書けないって思った時に、いろんな先生のもとを訪ねて相談に乗ってもらったことによって、自分は本当に何をしたいのかということを見つけることができたので、結果はとにかく受験してよかったなと思います。

Bさん：推薦入試に向けて面接や小論文の練習を先生とやりながら先生方から色々といけられたことに自分が答えられなかったことで、自分の化学の知識がまだまだ不十分で、勉強や対策も不十分で詰めが甘いなと思い知らされました。でもそのおかげで一般入試に気持ちを切り替えたときに何をどうどれだけやらなければいけないかが明確になって逆にモチベーションが高まって集中できるようになったので、推薦入試を受けてよかったと思います。



Cさん：二年生の間「応用数学、データサイエンスを学ぼう」と思っていたところが、三年生の4月になって、「やっぱり純粋数学をやりたい」と、いきなり進路を変えた。勉強する科目も変わった中で、総合型選抜の本番が11月で、9月ぐらいから学びの報告書などの作成にいざ取り掛かってみたら、自分が目指しているものの全体が見えてきて、ちょっと勉強のモチベーションも揺らいだりもしたけど、推薦入試を受けた時に、「自分やりたいことはやっぱり純粋数学なんだ」という、抑えてきた情熱を再確認できて、その後の一般入試につながった。

統計学自体を見て、いろいろなものの共通点を拾い上げて、それを抽象化して全体を説明できるような理論というものを見出すことができるということが統計学の魅力だったんですけど、でも見方を変えればその理論の究極形が純粋数学なんじゃないかと気づいたことで、再び数学への熱が高まってきて、それまでぼんやりとしか思っていなかった想いを言語化して報告書を作成できたので、自分の中での指針が明確化したと思います。

もともと自分が考えた道の先にあったのが今の数学なんじゃないかなと、ちゃんと思えたということが推薦入試を受けてみてよかったことだと思います。





高橋：後輩たちに向けての言葉として、どのような人が、学校推薦型、総合選抜型に向いていると思う？

Cさん：正直、僕が受けた△△大の特色入試は、数学さえ解けばいいと思うけど、でもその数学は一般入試のレベルを優に超えていて、普通に大学入試の一般入試の数学を勉強していたとしても絶対に解けないんです。いわゆる典型問題というものとはかけ離れている問題なので、今まで自分がやってきた数学の力を信じて、でも今までやってきた道からどれだけ外れて自由な発想で、自分で解法を切り開けるかというところが問題に対する唯一のアプローチなので、そこに向かっていける人となると、数学が大好きで、数学に対する道をさらに切り開きたいという熱を持ち、ぱっと見一度も見たことが無いような難問にもひるまずあれこれ思いつく解法を試してみ、色々な解法を自由に考えて答えにたどり着くということが好きな人、そして△△大学の教授が、凝りに凝って作ったオリジナルの問題に挑んでいくことが楽しいと思える人が向いているんだと思います。解けるかどうか、合格するかどうかということを越えた部分が重要だと僕は思います。





高橋：**Bさん**は、※※大学の推薦入試を受けますって言った時に、いろんな先生が心配して婉曲的に（軌道修正の）声掛けをしたんじゃないかと思うんだけど、でも志を曲げずに挑んでみてどうだったのかな？

Bさん：さっきの質問では受けて良かったといったんですけど、受けて後悔が無いと言われてればちょっと……。やっぱり推薦なのに2月まで結果が分からないという日程的な大変さもあるし、自分の現状の学力を考えると、一般入試の直前に面接や小論文の対策もしなければならぬということなので時間配分に困った所もある。その大学の一般入試でも遜色ない学力を身に着けた上でチャンスを増やすために推薦入試を受けてみるということならいいと思う。

高橋：確かに推薦入試だから学力以外の部分で受かりやすいとかってことは無いよね。日ごろの勉強や学力ってやっぱり大事だということだよな。





高橋：Aさんとは
推薦入試対策でのやりとりを
もったしたかったなあ。

Aさん：いや、私はそのつもりだったんですけど（笑）。

〇〇大学共創学部合格者のグループラインみたいなのがあって、「推薦で1次審査通りました！」みたいな人たちの経歴を見てたら、合格してきた人はあまりにもすごい人が多くて、島根県西部で生活しているとなかなかできないような経験をしている子ばかりでした。だからあまりお勧めはしませんが、でも志望理由書や活動報告書なんかはものすごく書き込まなければいけないので、自分が何をしたいのかということがはっきりするので、11月ぐらいの受験勉強のモチベーションの維持が難しくなる時期に、モチベーションを上げて勉強を頑張る糧にできたことが良かったと思う。





高橋： **Aさん**が推薦入試を受けることになる時点で、一般入試で十分挑戦できる力があると思ってたけど、でも推薦入試ということになると、江津に居ては得られないような経験とかバックグラウンドが求められるという点で不利になったかもしれんね。想いや頭を鍛えることばかりじゃなくて、実際の経験の場をもっと創りだしていくことが必要だったんじゃないかと、**Aさん**の受験を通してこちらも反省しました。

高橋： 先生もみんなが志望理由書を考えるのを手伝いながら、今までどういう経験をしてきたのかということがすごく大事だなあと思うし、高校での生活がみんなにとってよりいきいきと活躍できる機会を一つでも多く作っていったらいいなと思うね。
例えば僕が「数理部」と銘打って勝手に放課後に講習したりしてるけど、その中で「数学オリンピックに出場しよう！」みたいに盛り上がって有志を募ってたりするけど、そういう経験を生徒が「やりたい！」って思った時に「やろうぜっ!!」って言ってあげたいもんね。

高橋： こんなんあったら良かったなっと思うもんはある？



Aさん：さっきの共創学部の場合でいうと、合格者はみんな名の知れた公式の大会なんかに出場してて、智翠館でも「学び祭」とかやってるから、外部にも発表できる機会があれば推薦入試にも生きてくると思う。

高橋：君たちが頑張っているのを見て、先生ももっと勉強せなあかんってすごく思う。そういう意味でも三年間一緒に学べたのが先生にとってもすごくうれしいなって感じ。

高橋：一般入試だけでなく総合選抜型・学校推薦型の推薦入試も併せて受けたということは、時間的にも内容的にも大変だったわけだけど、三人とも推薦入試を受けることが決してハンデにならず、逆にすごく学力を伸ばしたということで、無駄なく効率よく受験を乗りきることができたことの自己分析をしてみたいんだけど。

Aさん：自分は部活が11月まであって、推薦入試の時期と重なっていたのでなかなか大変だったんだけど、部活の引退と1次審査の発表とが同時期にあって、結果的にぽっかりと空白になったそのタイミングで「ここから本気でやらないと本気でヤバイ」と思って、一般入試に向けて気持ちを切り替えてひたすら勉強に集中できたことが大きかったと思う。それに三年間部活をやり切ったことで体力も養われてた（笑）と思うし・・・。



Bさん：自分はメリハリをつけることは大事だと思っていて、典型的に勉強が好きというわけではないので、どうしても「ゲームしたいなあ」なんて思っちゃったりするんだけど、何かを我慢しながら別のことを頑張るということができず、集中することが苦しくなるんで、逆に思い切ってゲームを飽きるまでやって、すっきりしたところで「あとは勉強しかやることないじゃん！」と思って頑張った。中途半端に勉強するよりは、メリハリつけて勉強やった方がいいのかなあと思います。



高橋：ここは編集でカットします（笑）

Cさん：

僕は2年生の終わりに、部活を続けるかやめるかという選択があったんですけど、まあ続けるという選択をして、僕が所属していた放送部は4月が始まると7月ごろまでノンストップで忙しく、ほぼ休みが無いという状態で、3年生の8月からやっと暇になったんです。で、そこから勉強に身が入ったかというところなので、危機感をもって共通テストの勉強を頑張って結果的には9割取れたんですけど、共通テストはやらなきゃいけないことが明確で、これをすれば伸びるということがある程度わかるわけですが、そこから二次試験に向けて勉強していくときに、何をしたら伸びるのかということが不透明な中で頑張らなければならないことが結構しんどかった。迷走していろいろなことに手を出した結果、合格には至らなかったということで反省点かなと思っています。

大学の過去問をやりながら、自分の基礎の足りてない部分も自覚したし、やっぱり共通テストと志望校の二次試験とのギャップというのがかなり大きくて、求められている能力もかなり違うという中で、問題の難易度についていけないということや、時間も足りない、基礎も足りてないとあれこれ迷った結果、自分は応用力を伸ばすことに絞って過去問対策を頑張ったんだけど、結局は小手先の対策に過ぎず、根本的な学力を伸ばすまでには至らなかったと思います。



高橋：それは、ある意味「これからまだまだ伸びる余地がある」ということやね。

Cさん：まあ、もう一度基礎から見直していこうと思います。序盤の問題を解きながらすでに時間が無いという状況が敗因だったかなと思っていて、序盤から結構求められているレベルが結構高い問題が出てくるので、序盤で余裕をもって解いていって中盤以降どれだけ伸ばせるかっていう戦いになると思います。

高橋：先日、総合選抜型・学校推薦型入試を受けた生徒たちと話をしたけど、将来に対する明確さとか目標に対する明確さという点では君たちより明確にあったと思う。でも君たちと話してて、自分の受験を振り返っての自己分析能力がとても高いなって思う。先生方が皆に対して分析してること以上に、自分自身を客観的に分析力できてすごいなと思いました。



高橋：**Cさん**には今日のインタビューを承諾してもらって本当にありがたかった。△△大の教授たちに直接対峙した経験から、やっぱりそこにこだわるという浪人の選択の道っていうのは、先生も今まで想像したことがなかった。
普通の生徒は共通テストに向けて何をすればよいのかなかなか分からない中で、**Cさん**は明確にそれを理解して当たり前のように9割を超える結果を出してびっくりしました。もう一年時間をかけることでイケる！と僕は確信しています!!

高橋：三人とも智翠館特別コースにとって、本当に誇りに思える卒業生ですので、今後ともぜひ後輩たちのために力になってあげてください。本日はありがとうございました!!

